

- 一、注射部ハ肩胛間部ニテ皮膚ノ柔軟ナル部ヲ撰ヒ針ヲ刺シ皮下ニ注射スヘシ
- 但職業關係上前記部位ノ不便ナルトキハ適宜ノ部位ヲ撰ヒ注射スルモ妨ケナシ
- 一、注射局部ハ注射前微温湯及石鹼ヲ以テ充分ニ汚垢ヲ拭去シ然後「アルコール」ニ浸セル「ガーゼ」又ハ脱脂綿ニテ可寧ニ摩擦シ注射後同上「ガーゼ」又ハ脱脂綿ニテ針痕部ヲ輕ク按摩シ絆創膏ヲ貼付スヘシ
- 一、注射器ハ使用前普通「アルコール」又ハ二十倍ノ石炭酸水ニテ消毒シ更ニ二百倍ノ石炭酸水ニテ洗滌スヘシ
- 一、甲者ニ接種セル後乙者ニ接種スル場合ハ注射針ヲ二十倍石炭酸水或ハ「アルコール」ニ浸シ消毒スヘシ
- 一、豫防液ハ使用ノ際毎回必ス充分振盪スヘシ
- 一、病者、妊婦等ニハ豫防注射ヲ行フヘカラス
- 一、豫防液ハ冷暗所ニ貯藏スヘシ
- 一、豫防液ハ製造後三ヶ月以上ヲ經過シタルモノハ使用スヘカラス
- 一、豫防液注射後二十四時間ハ入浴スルコトヲ得ス
- 一、豫防液注射後二日乃至三日間ハ禁酒スヘシ
- 一、注射局部ハ清潔ニ保持シ爪爬スヘカラス
- 一、施行者ハ時々手指ヲ消毒スヘシ
- 一、開封セシ豫防液ノ使用殘餘ハ翌日再ヒ使用スヘカラス

第三節 赤痢豫防液接種ノ成績

本縣ニ於ケル赤痢患者發生ハ明治二十七年最モ猖獗ヲ極メ縣下各町村悉ク發生ヲ見サルナク患者數無慮一萬五千ヲ突

破シ其ノ慘害想像ニ餘アリシカ爾來時ニ多少ノ消長アリト雖トモ概シテ年々遞減ノ傾向ヲ示セリ

大正二年以降豫防接種ノ施行ヲ極力獎勵セル結果ナルヤ千名以上ノ患者ヲ算スルハ甚タ稀トナレリ之レ固ヨリ一般ノ衛生思想ノ向上ニ因ルヘシト雖モ豫防接種ノ效果亦タ與リテ大ニカアルモノノ如シ其ノ成績別表ノ如シ

赤痢豫防接種成績 (第一表)

年度別	種別	小字又ハ部落		接 種 ヲ 受 ケ タ ル 者				接 種 ヲ 受 ケ サ ル 者					
		數	同上	人口	患者	非接種人口ニ對スル百分比	死者	人口	患者	非接種人口ニ對スル百分比	死者		
大正二年		三五四	四七,五八	一七,九六〇	九〇	〇・五〇	一三	一四,四四	二元,五八	四八	一・四八	一五四	二元,一六
同 三 年		三五四	四七,五八	一七,九六〇	一〇〇	〇・五五	一七	一六,五〇	二元,四〇〇	七九七	二・八一	三〇八	三元,六四
同 四 年		四九七	一〇〇,六七	二七,四〇七	六〇	〇・三三	九	一五,〇〇	七,二二〇	五三三	〇・三六	一八九	三六,〇五
同 五 年		四九七	一〇〇,六七	二七,四〇七	三三	〇・三三	四	一四,七四五	二,六四	〇・五六	一〇九	四,〇二	
同 六 年		三三九	九八,九九	二六,九二八	五	〇・一九	九	七,〇六一	二,五三	〇・三六	一〇二	四,〇三	
同 七 年		三三九	九八,九九	二六,九二八	一三	〇・四九	三	一〇,一四〇	三,三三	〇・三三	一〇六	四,四九	
同 八 年		二二七	八二,八九七	二五,〇三三	一〇	〇・四〇	一	五,六九四	五九	〇・一〇	七	一一,八六	
同 九 年		一三三	八四,一七五	二四,〇三三	一	〇・四二	一	六,〇一五	一四	〇・二三	四	三,三三	
同 十 年		一三三	八四,一七五	二四,〇三三	一	〇・四二	一	五,五二二	五	〇・一〇	一	二,五三	
同 十 一 年		二五七	一〇〇,四〇六	二二,七〇六	七	〇・三三	六	八,九一七	二四	〇・二四	四	二,〇四	
同 十 二 年		六	八六,二八九	二二,七六三	八	〇・三六	三	六,四,五三	三	〇・四七	一〇	二,九七	

年度別	種別 小字又ハ ハ部落 數	同上		接種ヲ受ケタル者		接種ヲ受ケサル者	
		總人口	人口	患者	死者	人口	患者
同十三年	四	七、三三二	三、三三九	三	〇・二五	一六・三三	六〇、五九三
合計	三、三三〇	一、〇一五、〇四六	三、七、六四三	六三	〇・二四	九	三、〇六六

赤痢豫防接種成績 (第二表)

年度別	種別 小字又ハ ハ部落 數	同上總人口	接種後十日以内發病者				接種後十日以上ノ發病者			
			接種人口	患者	死者	患者ニ對スル 接種者ニ對スル 百分比	接種人口	患者	死者	患者ニ對スル 接種者ニ對スル 百分比
大正二年	三、四四	四七、三五六	一七、九六〇	五〇	〇・元	一〇	一〇・〇〇	四〇	〇・三三	
同三年	三、五五	四八、九六〇	一五、九六〇	六〇	〇・元	七	一一・六七	四三	〇・二七	
同四年	四、九	一〇〇、七七一	三三、四〇三	三三	〇・〇一	二	九・五三	四三	〇・一四	
同五年	四、九	七五、四四一	二七、六六六	一一	〇・四	一	九・〇九	三九	〇・一八	
同六年	三、九	九六、九七九	二六、九八八	一〇	〇・三	六	一〇・〇〇	三三	〇・三三	
同七年	三、三	一四、三〇〇	三、一三〇	一三	〇・七	一	〇・六七	一〇	〇・〇六	
同八年	三、七	八、八九七	三、九〇〇	一	一	一	一	一〇	〇・〇四	
同九年	三、三	八、一七五	三、〇三三	一	〇・〇	一	一	一五	〇・〇六	
同十年	三、三	七〇、三〇八	一五、三六六	四	〇・〇一	一	一三・〇〇	九	〇・〇九	

第一表ニ表示セル十二年間ニ於ケル被接種者二十六萬七千六百四十三人中罹病セルモノ六百五十二人之ヲ百分比ニセハ〇・二四%ナリ

同區域内ニ於ケル未接種者七十四萬七千四百五五人中罹病者三千四百三十七人ニシテ百分比〇・四六%ナリ
未接種者ハ被接種者ニ比シ其ノ罹病率ノ約二倍弱ニ當レリ

第二表ノ成績ハ注射後其防禦力ノ發現ヲ注射後十日ヲ限度トシ觀察セルニ注射完了ヨリ十日迄ノ間ニ發病セルモノ〇・一三%。注射完了ヨリ十日以上ヲ經過シテ發病セル者〇・一一%ニシテ兩者ノ差異ハ〇・〇二%ナリ
死亡率ハ被接種者ニ於テハ一三・九六%ニシテ未接種者ハ三三・六〇%ニシテ示シ稍ヤ接種ノ效力ヲ證シ得ヘシ

第一表ノ成績ニ依レハ豫防接種ハ全然罹病者ヲ絶ツ能ハサルノミナラス其被接種者、未接種者ノ罹病率ノ差僅少ナル如クナルモコハ接種セル部落及被接種者ハ多ク已ニ病全般ニ蔓延セル危險地及其ノ最モ危險地域内ニアルモノノミヲ接種セル關係上其ノ罹病率高キニヨルナランカ

若シ之ヲ未夕病毒侵入セサルニ先立チ之レカ勵行ニ全力ヲ注カハ或ハ豫期以上ノ成績ヲ擧ケ得ヘシ況ンヤ其經過日數ヲ短縮シ死亡率ヲ甚シク遞減スル利益アルヲヤ

スタイネルハ一病院ニ於テ二〇四人中一五六人ニ接種シ四八人之ヲ行ハスシテ此兩者ヲ觀察シツツアリシニ未接種者

ノ二六・八%中ヨリハ患者ヲ出セルニ反シ被接種者中ヨリハ五・七%ニ於テ發病ヲ見タルノミナリ而モ此大部分ハ第一回注射後二、三日シテ發病セルモノニシテ寧ロ其ノ潜伏期中ニ接種セルモノト推セラルルト稱シテ深ク接種ノ效果ヲ信セリ(醫事新聞一千百十九號赤痢號)

第四節 一 流行區域ニ於ケル接種成績

一、大正十四年ニ於ケル流行ニ際シ一區域ヲ限リ豫防注射ヲ施行シ其ノ後ノ患者發生狀況ヲ觀ルニ左ノ如シ
流行區域戸數五〇戸 人口二一六名 被接種者一〇六名中罹病者五名

本成績ニヨレハ豫防接種後發病者五名ヲ出シ四・六%ノ罹患率ヲ示シ、未接種者ニ於テハ二十五名即チ二二・七%ノ罹患率ヲ示セリ

二、美馬郡重清村ニ於ケル赤痢豫防接種ト赤痢發病ノ關係

本村ニ於テハ從來年々多少ノ赤痢患者ヲ發生シ小流行ヲ反覆セル爲村民等其ノ豫防費負擔ニ苦ミ赤痢防遏ノ急ナルヲ自覺シ一致シテ豫防接種ヲ希望スル狀況ナルヲ以テ大正三年ニ第一回ノ注射ヲ施行シ其成績幸ニ良好ナリシ爲村民等一層之レカ效果ヲ確信シ十箇年間繼續施行セルニ爾來一名ノ患者ヲモ出スコトナク經過シタルヲ以テ大正十三年ニ至リ一時之レカ施行ヲ中止シ今後ノ經過ヲ觀察スルコトトセリ其ノ接種成績左表ノ如シ

年次	人口	豫防接種人員	患者發生數
明治四十二年	五、三〇七		四
同 四十三年	五、三一二		一四

同 四十四年	五、三二六		五八
大正元年	五、三三二		九
同 二年	五、三〇九		五
同 三年	五、三三九	九二四	一一
同 四年	五、三二六	四、〇五一	
同 五年	五、二九六	三、一二九	
同 六年	五、三〇三	三、二二九	
同 七年	五、三一六	一、二三七	
同 八年	五、三二〇	三、三一六	
同 九年	五、三〇八	二、二四二	
同 十年	五、二九七	二、一二〇	
同 十一年	五、三〇一	二、六一八	
同 十二年	五、二八二	二、三五七	
同 十三年	五、二五三		
同 十四年	五、一七五		

上表ノ結果ヲ觀ルニ大正三年豫防接種ヲ開始セルニ拘ラス尙ホ一名ノ患者發生セルモ大正四年以降ニ於テハ全ク發生ヲ免レタリ本村ニ於ケル豫防策トシテハ豫防接種ノミナラス蠅ノ驅除ニ對シテモ相當努力シ大正十四年一箇年間ニ

種別	接種區域	町村名	同上人口	接種人員	全身		症狀		局所	
					人	%	人	%	人	%
一市十郡合計	豊	五、七、〇	一三、五、一	四、五、三	〇・〇三	四	〇・〇〇三	二、一、〇、一	〇・一、六	

多數ナル接種人員ニ對シ反應ヲ調査スルコトハ頗ル繁雜且困難ニシテ之カ正確ヲ期スルコト能ハサルモ大正十三年ニ施行セル赤痢豫防接種者一萬三千五百九十一人ニ對シ副作用ヲ調査セルニ一般ニ輕微ナルモ三日以上休業ヲ要スル程度ノ者〇・〇〇三%アリ之等ハ主トシテ注射部位ノ疼痛及發熱ヲナセルモノニシテ接種ニ因リ危險狀態ニ陥リシモノハ一名モナカリシ

第八章 赤痢菌型ト流行關係ニ就テ

徳島縣ニ於ケル赤痢ハ明治二十七年ニ最モ猖獗ヲ極メ一萬五千余名ノ患者ヲ發生シ縣下到處トコロ、慘害ヲ蒙ラサルハナカリシカ爾來年々遞減セント雖モ一高一低尙其發生千餘名ニ及フコトアリ菌型ニ關スル正確ナル調査ハ往時ノ流行ニ在リテハ一般ニ對シ之ヲ爲ササリシモ其ノ爆發的流行ノ箇所ニ限り菌型ノ檢索ニ努メタルニ何レモ志賀型ヲ證明セリ

依テ本縣ニ流行セル赤痢ハ主トシテ志賀型ナリト思惟セリ、然ルニ大正十四年赤痢豫防撲滅策ニ對スル一資料トシテ縣下全般ニ亘リ菌檢索ニ努メ之カ分類ヲ試ミタルニ左ノ成績ヲ得タリ

第一節 菌型ト流行關係

赤痢流行ニ際シ之カ流行狀態ト菌型トニ一定ノ關係アルヤヲ思惟シ大正十四年中ニ發生セル一市九郡十八箇町六十四箇村ノ發生患者五〇九名中二一六名ヲ檢索シ六七例ノ赤痢菌ヲ檢出セリ今コレヲ表示セハ左ノ如シ

各郡市別ニ依ル赤痢患者ノ菌檢出表

郡市別	患者總數	檢査人口	菌型					計
			志賀菌	駒込A菌	駒込B菌I	駒込B菌III	川瀬フレキシネル	
徳島市	八一	二八	一	二	二	三	二	一〇
名東郡	二七	一	一	一	一	一	一	一
勝浦郡	六九	四四	一	二	一	二	一	四
那賀郡	一九	九	一	二	一	一	一	三
名西郡	二一	二	一	一	一	一	一	二
阿波郡	二四	五	一	一	一	一	一	〇
板野郡	一七六	一〇六	三	一	三	三	三	四〇
麻植郡	二〇	九	一	一	一	三	一	三
美馬郡	二四	四	一	一	一	二	一	三
三好郡	四三	一〇	一	一	一	一	一	一
計	五〇四	二一八	三三	九	六	一四	五	六七

徳島市ニ於テハ検査人員二十八名中志賀型一例駒込菌族七例ノ内(A型、二駒込B型I二、駒込B型III三)川瀬フレキシネル二例計一〇例ヲ検出シタリ

名東郡、勝浦郡、那賀郡、名西郡、麻植郡、美馬郡ノ各郡ニテハ検査人員六九名中検出シタルハ駒込菌族ノミ(駒込A型、七駒込B型III七)一六例ヲ検出セリ

板野郡ニ於テハ検査人員一〇六名中志賀菌三二例、駒込B型I三例、駒込B型III三例、川瀬フレキシネル三例計四〇例ヲ検出シタリ

依是觀之本縣ニ於ケル赤痢菌型ハ各郡市共多種多様ニシテ一菌型ノミヲ以テ流行スルモノニアラスト雖モ突發的ニ流行シタル板野郡松坂村ニ於テハ患者五五名中志賀菌二七例ヲ證明シ同郡北島村ニ於テハ患者三九名中志賀菌四例ヲ證明セリ

即チ流行型ヲ呈セル棚野村、川内村、松坂村、北島村ノ四箇村中松坂村、北島村ニ於テハ志賀菌ノミヲ以テ流行セルモノト思惟スルモ他ノ二箇所ハ各型菌ノ混合流行ナルヤノ觀アリ

第二節 検査材料及検査方法

赤痢患者糞便ヨリ其病原菌ヲ分離培養スルニ際シ排便後時間ヲ經過セルモノニ於テハ菌検出率ノ低下スルハ既ニ周知ノ事實ニシテ其理由ニ就テモ種々攻究セル學者多シ

余ハ早期患者ノ採便ヲナサンカ爲豫メ警察官署ニ通牒ヲ發シ若シ赤痢患者發生セル時ハ直チニ衛生課ニ電話ヲ以テ報告ヲナサシメ衛生課ニテ該報告ヲ受ケタル時ハ可及的速ニ患者發生場所ニ至リ駒込式採便管ヲ用ヒテ直接患者ノ肝門ヨリ採便シ其粘液部分ヲ白金耳ヲ以テ生理的食鹽水中ニテ洗滌シ直チニ遠藤氏平板培養基ニ塗抹シ孵室ニ收ムルコト

十八時間乃至二十時間ノ後疑シキ聚落ヲ認メタル時ハ之レヲ鈎菌シ二十倍各型(志賀、駒込A、駒込B III真正フレキシネル川瀬フレキシネル)ノ家兎免疫血清ニテ各々凝集反應ヲ試ミ更ニ葡萄糖寒天ニ穿刺シテ瓦斯發生ノ有無ヲ檢シ瓦斯發生ナク固有運動ヲ認メサル時ハ純粹培養ヲ行ヒ試験管凝集反應ヲ檢シ同時ニ牛乳培養及イントールノ検査ヲ行フ

赤痢血清ニ百倍以上凝集スルモノニシテ固有運動ナク牛乳凝固セス瓦斯發生ナキモノヲ赤痢菌ト決定シ更ニ含水炭素分解状態ヲ檢スルト共ニ各型赤痢免疫血清ノ凝集反應ヲ試ミ類屬凝集反應ヲナスモノニ就テハ「カステラニ」吸収試験ヲ行ヒ以テ菌型ヲ決定セリ

第三節 糖類ニヨル赤痢菌分類

赤痢菌鑑別分類法ハ多種ニシテ目下我國ニ於テモ各種各様ニセラルルモ其代表的ナルハ左ノ三氏ノ分類法トス

赤痢菌分類法

二木博士分類法				志賀菌		種類	
駒込B III菌	駒込B II菌	駒込A I菌	駒込A菌	菌型	種類	リン	デキスト
+	+	+	+	+	リン	デキスト	マンニツ
+	+	+	+	+	マンニツ	デキスト	サカロ
+	+	+	+	+	サカロ	マンニツ	マルト
+	+	+	+	+	マルト	マンニツ	デキスト
+	+	+	+	+	デキスト	マンニツ	ラクト
+	+	+	+	+	ラクト	マンニツ	アラビ
+	+	+	+	+	アラビ	マンニツ	ガラクト
+	+	+	+	+	ガラクト	マンニツ	

法類分士博賀志					法類分氏ツンレ				種類		
異型第五型	異型第四型	異型第三型	異型第二型	本型第一型	ストロング	フレキシネール	Y 菌	志賀菌	眞正フレキシネール	菌型	種類
同	同	水五% ペプトン	水十% ニチア	ナシ					+	リン	リン
+	+	+	+	+					+	デキ	デキ
+	+	+	+	-	+	+	-	-	+	マン	マン
+	+	+	-	-	+	-	-	-		セカ	セカ
+	+	-	-	-	-	+	-	-		ゼマ	ゼマ
+	+	-	-	-						リン	リン
										ラク	ラク
										アラ	アラ
										ガラ	ガラ

余ハ二本博士ノ分類法ニヨリテ之レヲ分類セリ
 即チ〇・五%ノ食鹽水ニ一・〇%ノ割合ニ「ウイツテペプトン」ヲ溶解シ之レニ一・三%ノ割分ニ各糖類ヲ加ヘ反應ヲ補正
 シテ弱アルカリ性トナシ「ラクムス」ヲ標示薬トナシテ一日十分間宛三回百度ニテ滅菌シ小試験管ニ約三cc 宛分注シタ
 ル液體培養基ヲ使用シタリ菌量ハ約一白金耳トシ三十七度ノ孵室中ニ放置スルコト一週間ニシテ毎日之レヲ觀察スル
 ニ其分解状態左ノ如シ

番 號	氏 名	デキスト ローゼ	マンニツト	サツカロ ーゼ	マルトーゼ	デキスト リン	ラクトーゼ	アラビ ン	カラク ト
一石	友 〇	+	+	-	+	+	-	+	+
二小	ハ 〇	+	+	-	+	+	-	+	+
三山	淺 〇	+	+	-	+	+	-	+	+
四堤	信 〇	+	+	-	+	+	-	+	+
五田	儀 〇	+	+	-	+	+	-	+	+
六稻	則 〇	+	+	-	+	+	-	+	+
七井	ト 〇	+	+	-	+	-	-	-	+
八島	ア 〇	+	+	-	+	+	-	+	+
九庄	勝 〇	+	+	-	+	+	-	+	+
一〇芦	賢 〇	+	+	-	+	+	-	+	+
一一篠	朱 〇	+	+	-	+	+	-	+	+
一二中	郎 〇	+	+	-	+	+	-	+	+
一三岡	光 〇	+	+	-	+	-	-	+	+
一四脇	豊 〇	+	+	-	+	+	-	-	+
一五武	和 〇	+	+	-	-	-	-	+	+

四七	四六	四五	四四	四三	四二	四一	四〇	三九	三八	三七	三六	三五	三四	三三	三二	三一
眞	小	河	落	賀	高	赤	赤	高	佐	伊	盛	盛	舟	高	佐	根
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
俊	多	朝	ヲ	利	ク	正	イ	ヲ	良	源	+	好	タ	ツ	タ	辰
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
-	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+

三〇	二九	二八	二七	二六	二五	二四	二三	二二	二一	二〇	一九	一八	一七	一六	番
豊	玉	賀	新	井	落	賀	藤	藤	三	赤	赤	林	佐	株	號
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	氏
光	幾	早	ヤ	タ	ウ	文	ミ	キ	ア	ク	ク	シ	チ	フ	名
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	名
+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	ロ
-	-	-	-	+	-	-	+	+	+	+	+	+	+	+	キ
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ス
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ト
-	-	-	-	+	-	-	+	-	-	-	+	+	-	-	ト
-	-	-	-	+	-	-	+	-	-	-	+	+	-	-	ト
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ト
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ト
-	-	-	-	+	-	-	+	-	-	-	+	+	-	-	ト
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ト
-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ト
-	+	+	-	-	-	-	-	+	+	+	+	-	-	+	ト
+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	ト

番 號	氏 名	デ キ ス ト ロ ー ゼ	マ ン ニ ツ ト	サ ツ カ ロ	マ ル ト ー ゼ	デ キ ス ト リ ン	ラ ク ト ー ゼ	ア ラ ビ ン	セ カ ラ ク ー
四八	部 吉	+	+	-	+	+	-	-	+
四九	浅 節	+	+	-	-	-	-	-	+
五〇	川 三	+	+	-	+	+	-	+	+
五一	川 一	+	+	-	+	+	-	+	+
五二	平 二	+	+	-	-	-	-	+	+
五三	山 貞	+	+	-	-	-	-	+	+
五四	平 正	+	+	-	-	-	-	+	+
五五	成 利	+	+	-	-	-	-	+	+
五六	黒 政	+	-	-	-	-	-	+	+
五七	佐 三	+	-	-	-	-	-	+	+
五八	田 猛	+	-	-	-	-	-	+	+
五九	近 龜	+	-	-	-	-	-	+	+
六〇	川 正	+	-	-	-	-	-	+	+
六一	板 八	+	-	-	-	-	-	+	+
六二	石 信	+	+	-	+	+	-	+	+

番 號	氏 名	デ キ ス ト ロ ー ゼ	マ ン ニ ツ ト	サ ツ カ ロ	マ ル ト ー ゼ	デ キ ス ト リ ン	ラ ク ト ー ゼ	ア ラ ビ ン	セ カ ラ ク ー
六三	赤 三	+	+	-	-	-	-	+	+
六四	黒 三	+	-	-	-	-	-	-	+
六五	高 一	+	-	-	-	-	-	-	+
六六	桑 三	+	-	-	-	-	-	-	+
六七	高 三	+	-	-	-	-	-	-	+

以上含水炭素分解状態ニヨリ菌型ヲ區別スルニ志賀菌型ニ屬スルモノ、三三例、駒込A型ニ屬スルモノ、八例、駒込B型I、八例、駒込B型IIIニ屬スルモノ、一三例、川瀬フレキシネルニ屬スルモノ、五例アリ

第四節 凝集反應ニ依ル赤痢菌ノ分類

凝集反應用ノ各型血清ハ全部駒込病院ヨリ分譲ヲ受ケタルモノヲ使用シ百倍以上ニ凝集セルモノヲ陽性ト決定シタリ其成績左ノ如シ

番 號	氏 名	志 賀 型	駒 込 A 型	駒 込 B I 型	駒 込 B III 型	川 瀬 フ レ キ シ ネ ル 型
一	石 友			+		
二	小 八			+		
三	山 浅			+		
四	堤 信			+		

込B型IIIニ屬スルモノ一三例、川瀬フレキシネル五例アリ

第五節 菌型ト月別

大正十四年中ニ發生セル赤痢患者中検査人員二一六名菌數六七例ヲ菌型ト月別ニ表示スレハ左ノ如シ

月次	検査セシ患者數	菌型					計
		志賀菌	駒込A型	駒込B型I	駒込B型III	川瀬フレキシネル型	
七月	三五	一	四	二	一	一	七
八月	一一三	二	四	五	八	一	一九
九月	三二	九	一	一	一	一	一三
十月	八	二	一	一	一	一	五
十一月	二八	一	一	一	四	三	一〇
計	二二六	三三	九	七	一三	五	六七

即チ七月ニハ検査人員三五名中志賀型一例駒込菌族六例(駒込A型四例、駒込B型I二例)計七例、八月ニテハ検査人員一一三名中志賀型二二例駒込菌族一七例(駒込A型ニ屬スルモノ四例、駒込B型I、五例、駒込B型IIIニ屬スルモノ八例)川瀬フレキシネル菌一例計三九例ヲ檢出セリ

九月ニハ検査人員三三名中志賀型九例、駒込B型III一例、川瀬フレキシネル型一例計一一例ヲ檢出セリ

十月ニ入りテハ不幸ニシテ「コレラ」ノ侵入ニ遇ヒ止ムヲ得ス菌型ノ調査ヲ中止セシ爲志賀型一例ヲ得シノミ十一月ニ

ハ二八名ノ検査人員中駒込菌族五例(駒込A型一例、駒込B型III四例)川瀬フレキシネル型三例計八例ヲ檢出セリ

第六節 菌型ト年齢別

大正十四年中ニ流行セル患者中菌ノ陽性患者六七名ヲ年齢別ニ表示スレハ左ノ如シ

年齢	志賀型	駒込菌族				川瀬フレキシネル型	計
		駒込A型	駒込B型I	駒込B型III	計		
至日	一四	五	二	六	三	三〇	
至日	六	一	一	三	一	一一	
至日	四	一	一	一	一	六	
至日	三	一	一	一	一	六	
至日	三	一	一	一	一	六	
至日	四	一	一	一	一	六	
至日	五	一	一	一	一	六	
至日	六	一	一	一	一	八	
六歳以上	五	一	一	一	一	八	
計	三三	九	六	一四	五	六七	

即チ一歳乃至一〇歳ノモノニ於テハ志賀菌一四例、駒込菌族一三例(駒込A型五例、駒込B型I二例、駒込A型III六例)川瀬フレキシネル三例計一三例、一一歳乃至二〇歳ノモノニ於テハ志賀型六例、駒込菌族四例(駒込A型一例、駒込B型III三例)川瀬フレキシネル一例計一一例

二一歳乃至三〇歳ノモノニ於テハ志賀四例駒込菌族二例(駒込A型一例、駒込B型I一例)
 三二歳乃至四〇歳ノモノニ於テハ志賀型三例駒込菌族三例(駒込A型一例、駒込B型I一例、駒込B型III一例)
 四一歳乃至五〇歳ノモノニ於テハ志賀菌一例駒込菌族四例(駒込A型一例、駒込B型III三例)川瀬フレキシネル一例計
 六〇歳以上ニ於テハ志賀型五例駒込B型I三例計八例ヲ檢出セリ

第七節 菌型ト死亡率

赤痢ノ死亡率ニ關シテヨホマン氏ハ志賀菌ニテ一〇乃至一五%トスルモ歐洲ニテハ大體ハ非常ニ少ク大戰時ニ於ケル
 本病ノ死亡率ハ二%内外ノ少數ナリト云フ
 我國ニ於ケル死亡率率ノ高率ナルハ周知セラルル處ナルモ主トシテ隱蔽セラレ易キ關係上發見後傳染病院等ニ重症ノモ
 ノ多ク入院スルノ爲ナランカ
 大正十四年中ニ於テ菌陽性ナリシ患者六七名ニ就キ死亡率ヲ表示スルニ左ノ如シ

菌	菌型	菌陽性數	同上死亡數	同上百分比
志賀	A型	三三	六	一八・一
駒込	B型I	八	一	七一・四
駒込	B型III	七	五	七一・四
駒込	B型III	一四	三	二一・四

川瀬フレキシネル型	計	患者總數	同上死亡率	六歳以下ノ患者數	同上死亡率
五	六七	一〇三	一五・五%	三〇	四〇・〇%
一	一五	一〇八	二七・八	三二	三六・三
平均	一五	九八	二九・六	三〇	五六・六
平均	一五	二六	三四・六	七	二六・九
平均	一五	三七	二四・三	一三	三八・四
平均	一五	五五	二〇・〇	一五	六六・七
平均	一五	一三七	四〇・九	五五	六五・四
平均	一五	一三四	四五・五	五八	五一・七
平均	一五	八一	四三・二	四七	五五・三

赤痢菌各型流行區域ノ死亡率

年別	流行區域名	菌型	患者總數	同上死亡率	六歳以下ノ患者數	同上死亡率
大正十一年	板野郡里浦	志賀型	一〇三	一五・五%	三〇	四〇・〇%
同十二年	麻植郡川島	同	一〇五	一三・三	一三	三六・三
同十三年	板野郡住吉	同	一〇八	二七・八	三二	五九・三
同十三年	板野郡應神	同	九八	二九・六	三〇	五六・六
同十四年	板野郡川内	異型	二六	三四・六	七	二六・九
同十四年	板野郡北島	志賀型	三七	二四・三	一三	三八・四
同十四年	板野郡松坂	同	五五	二〇・〇	一五	六六・七
同十二年	徳島市	異型	一三七	四〇・九	五五	六五・四
同十四年	徳島市	同	一三四	四五・五	五八	五一・七
同十四年	徳島市	同	八一	四三・二	四七	五五・三

志賀型ヲ檢出シタル患者三三名中死亡者六名一八・一%駒込菌族ヲ檢出シタル患者二九名中死亡者八名二七・五%、川瀬フレキシネル患者五名中死亡者一名二〇%ナリ

即ち平均二二・四%ノ死亡率ヲ現ハセリ然シテ大正十四年板野郡北島村ニ發生セル志賀型流行ハ二四・三%ノ死亡率ヲ、同志賀型ニヨル板野郡松坂村ハ二〇・〇%ノ死亡率ヲ現ハス
 然シテ同年徳島市ニ於ケル非志賀型ノ死亡率ハ四三・二%ノ高率ヲ示セリ
 即ち本縣ニ於ケル赤痢患者ノ死亡率ハ從來一部學者ノ報告セル如ク志賀型患者ニ死亡率高く、異型菌患者ニ死亡率低シト稱スルカ如キ事ナク却ツテ駒込菌族ニ因ルモノ高率ヲ示セリ

第八節 各府縣ニ於ケル菌型分布状態

府縣名	本型					ストロフレキ	和歌山Y	菌備考
	第一型	第二型	第三型	第四型	第五型			
北海		+						
青森	+							
岩手								未調査
山形	+							
宮城		+						
福島								未調査
茨城		+						
栃木		+						

群馬									未調査
埼玉									未調査
千葉									未調査
神奈川				+					
新潟					+				
富山									未調査
石川									
福井									
長野									
岐阜									未調査
滋賀									
山梨									未調査
静岡									
愛知									
三重									未調査
京都									
奈良									未調査

府縣名	型					ストロフレキ シネル	和歌山 Y	菌備考
	第一型	第二型	第三型	第四型	第五型			
和歌山縣								未調査
鳥取縣								未調査
島根縣			+					未調査
廣島縣								未調査
愛媛縣				+				未調査
高知縣								未調査
大分縣			+	+				未調査
福岡縣			+		+			未調査
佐賀縣								未調査
長崎縣			+					未調査
熊本縣		+	+					未調査
宮崎縣							+	未調査
沖縄縣								未調査

菌型判明セル二十三府縣中(本縣ヲ除ク)志賀菌及非志賀菌ノ流行箇所七縣ニシテ他ハ非志賀菌ヲ以テノミ流行セリ

第九章 赤痢保菌者

持続性排菌者及健康保菌者カ流行ノ源ヲナシ防疫上頗ル重要視スヘキハ普ク人ノ認ムル所ナリ、然ルニコレカ檢素ニ當リテハ頗ル困難ヲ感シ努力ヲ要スルモノナリ

本縣ニ於テハ往年屢々檢素ヲ企テタリシカ常ニ不良ノ結果ニ終レリ、大正十四年ニ於テハ患者竝ニ其家族及大正十三年ニ流行セル一區域ヲ限りコレカ檢素ヲ施行セリ

第一節 持続性排菌者

持続性排菌者ノ排菌期間ニツイテハ文献尠カラサルモ其主ナルモノヲ擧クレハ左ノ如シ

志賀博士ハ治癒後十二日間糞便中ニ赤痢菌ヲ證明セリ

渡邊博士ハ腸「チフス」患者ノ糞便中ヨリ長時間ニ亘リ赤痢菌ヲ證明セル報告アリ

百瀬博士ハ赤痢患者治癒後第十三日乃至十五日ニ至リ初メテ赤痢菌ヲ糞便中ニ證明スルヲ得サルニ至レリト

大野博士ハ輕症ノモノニ於テ治癒後五日間重症ノモノニ於テ治癒後十九日間赤痢菌ヲ證明セリ

クルーゼハ三箇月間ノ菌永續排泄者ヲ經驗セリト又ドリカルスキノ實驗セル例ハ二乃至六箇月ヲ經テ再發セルモノアリト

余ハ大正十四年ニ發生セル赤痢患者ノ恢復期ノモノニツキ檢素ヲ行ヒシニ左ノ成績ヲ得タリ

イ、檢査材料ノ採取方法

檢査材料ハ傳染病院隔離病舎等ニ收容ノ患者カ主要症狀消退後五日間ヲ經過シタルモノノ糞便ヲ採取シ檢査ヲ施行

セルコトヲ縣令ヲ以テ規定スルモ検査ニ供セル糞便ノ殆ント全部カ黄色普通便ナリ稀レニ粘液ノ少量ヲ含ムモノアリ、探便ハ主治醫又ハ看護婦、コレヲ行ヒ用器ハ硝子製ノモノヲ用ヒ可及的速ニ細菌検査所ニ送付スルコトトセリ探便ヨリ検査着手マテノ時間ハ數時間乃至二日間ヲ要セリ

尤モ成績ノ正確ヲ期スルニハ患者ヨリ直接ニ糞便ヲ採取シ直ニ培養ヲ行フコトカ必要ナルモ地方廳ノ現状トシテ一時ニ多數發生スル患者ニ對シテハヨリ以上ノ方法ハ困難ノ事情アリ

ロ、検査方法

遠藤氏寒天平板培養基ニ塗抹シ瞬間ニ收ムルコト約二十時間ニシテ疑シキ「コロニー」ヲ釣菌シ多價馬血清ニテ凝集反應ヲ試ミ五〇倍ニ陽性ナルモノハ葡萄糖高層寒天ニ穿刺培養ヲ行ヒ瓦斯發生ノ有無ヲ檢シ瓦斯ヲ發生セサルモノハ牛乳培養基ニ移シ凝固ノ有無ヲ檢ス、一方形態並ニ運動ヲ檢シ桿菌ニシテ固有運動ナキモノハ赤痢各型菌兔免疫血清及含水炭素ノ分解状態ニヨリテ菌型ノ分類ヲナス

ハ、赤痢恢復期患者ノ菌検査

大正十四年ニ發生セル赤痢患者ノ恢復期ニ於ル檢出率並ニ排菌期間左ノ如シ

郡市別	第一回		第二回		第三回		第四回	
	陽性	陰性	陽性	陰性	陽性	陰性	陽性	陰性
徳島市	一	四六	一	四四		一		
名東郡		六		六				
勝浦郡		五五		五三				

郡市別	第一回		第二回		第三回		第四回	
	陽性	陰性	陽性	陰性	陽性	陰性	陽性	陰性
那賀郡		一五		一二				
海部郡								
名西郡		一〇		七				
根野郡		一〇六		一〇一				
阿波郡		一三		一三				
麻植郡		九		九				
美馬郡		六		六				
三好郡	一	六	一	六		一		
合計	二	二七二	二	一六七	二	一		

以上ノ成績ハ主要症狀消退後五日目ニ於テ材料ヲ送付セシメ検査ヲナセルモノニシテ二七二例中二名〇・七四%ノ陽性率ヲ示ス

排菌期間ハ一名ハ主要症狀消退後七日間一名ハ九日間持續シ第三回ノ検査ニ於テ何レモ粘液消失ト共ニ菌檢出不能トナレリ

ニ、他府縣ニ於ケル排菌日數

神奈川縣横浜市傳染病院(篤治病院)ニ於テ入院患者ニ對シ調査セルモノ

菌消失期間

府 縣 別	北 海 道		檜 木 縣		島 根 縣		大 分 縣		福 岡 縣		佐 賀 縣		長 崎 縣		宮 崎 縣	
	共 他 族	患 者 家 族	共 他 族	患 者 家 族	共 他 族	患 者 家 族	共 他 族	患 者 家 族	共 他 族	患 者 家 族	共 他 族	患 者 家 族	共 他 族	患 者 家 族	共 他 族	患 者 家 族
種 別																
年 別																
大 正 十 一 年																
大 正 十 二 年																
大 正 十 三 年																

検査人員三七〇名ニ對シ保菌者四名ヲ發見セリ、保菌期間ハ一名第一回検査ヨリ第二回検査ニ至ル三日ノ間隔ヲ於テ
 ナスニ既ニ陰性トナリ第三回検査ニ二名消失シ第四回検査ニ於テ全部陰性トナル、排菌期ハ發見ヨリ最短三日間最長
 九日間ニシテ消失ス、
 〇、他府縣ノ健康保菌調査成績

郡 市 別	第 一 回		第 二 回		第 三 回		第 四 回	
	陽 性	陰 性	陽 性	陰 性	陽 性	陰 性	陽 性	陰 性
三 好 郡		二〇						
美 馬 郡		一						
麻 植 郡		二						
阿 波 郡		六〇		一〇				
板 野 郡		四		三		二		
名 西 郡								
海 部 郡								
那 賀 郡								
勝 浦 郡								
名 東 郡								
德 島 市		一三						

ハ、前年流行セル區域住民ノ赤痢保菌者ノ檢索

本調査區域ハ大正十三年五月十二日初發患者ヲ出シ十月二十七日發生ノ患者ヲ以テ最終トシ總數八一名ノ患者ヲ出セリ

調査範圍ハ前年發生セル患家竝ニ其ノ附近住民ニシテ大正十四年十一月二十六日ニ檢査人員一、二三名十二月二十六日ニ終了セリ

檢査場所ハ村傳染病院病舎ノ一部ヲ使用セリ檢査従事者ハ衛生技手一名防疫監吏二名小使一名ナリ

北島村ニ於テハ大正十四年夏季ノ流行終熄後約二箇月後ノ九月二十九日ニ檢査ヲ開始シ十一月二十八日終了シ檢査人員一〇七名ナリ

檢査成績

檢 査 場 所	檢 査 人 員	檢 査 成 績	
		陽 性	同 上 百 分 比
北 島 村	一〇七	一	〇・九三%
藍 園 村	一〇一六	二	〇・二〇%

前表成績ニヨリテ見ルニ流行後二箇月ヲ經過セル北島村ニ於テハ〇・九三%ニシテ一箇年ヲ經過セル藍園村ニ於テハ〇・二〇%ノ檢出率ナリ、健康保菌者ハ比較的少數ナルモ流行直後ニアリテハ稍々高率ヲ示ス、排菌期間ハ二名ハ發見ヨリ一週間ニシテ消失シ一名ハ十日間ニシテ消失ス

健康保菌者ノ檢出率ハ文献ニ見ル如ク多數ナルモノナルヤ疑問ナリ

病後ノ排菌者竝ニ健康保菌者ノ檢索ハ勞多ク效少キモノノ如シ

第一〇章 流行區域ノ移動

第一節 最近十箇年間ニ於ケル流行ノ移動

本縣ノ既往ニ於ケル赤痢カ流行型ニ發生セル箇所ヲ仔細ニ觀察セルニ一村或ハ一字ノ區域ヲ限リテ發生シ一回流行ヲ經過スル時ハ翌年ニ至リ全ク發生ヲ免ルルカ或ハ少數ノ患者ヲ發生セルニ止マルヲ常トシ流行ハ隣村ニ移行スルカ或ハ突如トシテ遠隔ノ場所ニ爆發スルコトアリ

之等ノ原因ヲ探究スルハ疫學上重要視ス可キコトト思考シ最近十箇年ニ於ケル著明ナル流行場所ヲ撰ヒ其ノ發生狀況ヲ觀ルニ左表ノ如シ

年次別流行區域 (第一表)

郡 別	發生區域	年 次												
		五 大 年 正	六 同 年	七 同 年	八 同 年	九 同 年	十 同 年	十 一 同 年	十 二 同 年	十 三 同 年	十 四 同 年			
板野郡	應神村吉成		三一											
同	藍園村奥野		一三		三							九	八五	
同	同村東中富		三									一	四八	
同	住吉村住吉	一				一		六			二	一九	九	
同	同村矢上		二	二							三	一二	九二	一